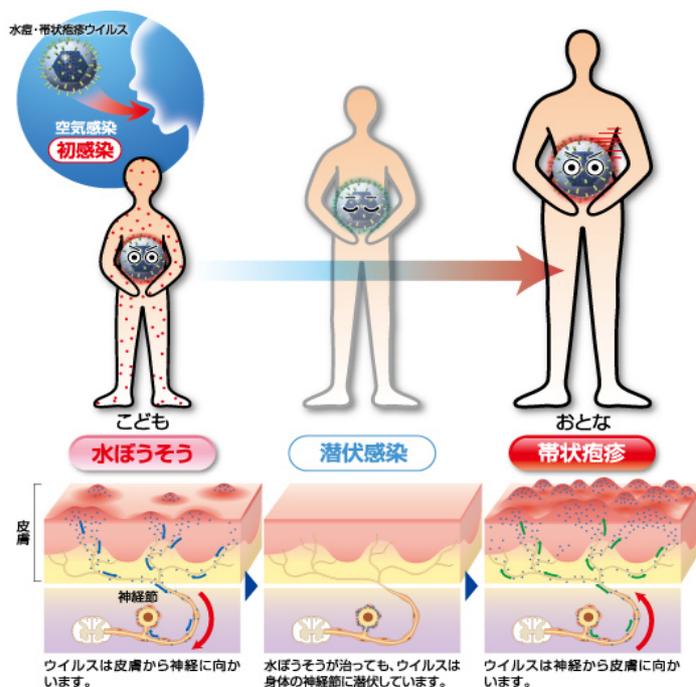


帯状疱疹は、神経の走行に沿ってピリピリと刺すような痛みと、これに続いて赤い斑点（はんてん）と小さな水ぶくれが带状（おびじょう）にあらわれる病気です。神経は身体の左右をまたぐことはないので、左右どちらか一方にだけあらわれるのが特徴です。この症状に由来して、「帯状疱疹（たいじょうほうしん）」という病名がつけられました。胸から背中にかけて最も多くみられ、全体の半数以上が上半身に発症します。また、顔面、特に眼の周囲も発症しやすい部位です。



## ＜水痘・帯状疱疹ウイルス＞

帯状疱疹はウイルスによって起こる病気ですが、帯状疱疹のウイルスと水痘（水ぼうそう）のウイルスは同じものです。子どもの頃にこのウイルスに初めて感染すると、水ぼうそうを発症します。水ぼうそうが治ったあとも、ウイルスは脊髄から出る神経節という部位に潜んでいます。日本人のおよそ9割は、体内に水痘・帯状疱疹ウイルスを持っていると考えられています。



## ＜好発年齢＞

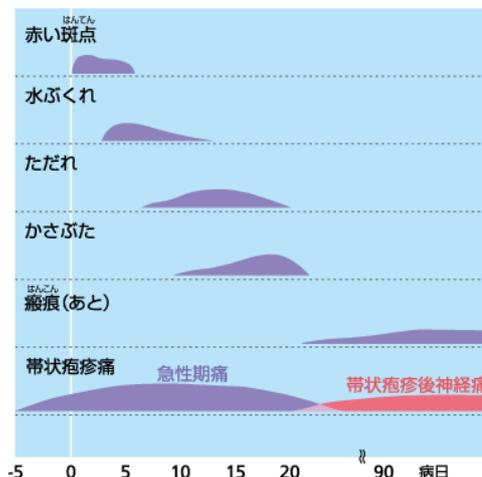
普段は体の免疫力によってウイルスの活動が抑えられていますが、免疫力が低下するとウイルスは再び活動し、増殖をはじめます。そして、ウイルスは神経の流れに沿って神経節から皮膚に移動し、帯状疱疹を発症します。帯状疱疹の発症には過労やストレスが引き金になりますが、年齢も関係しています。日本人では50代から帯状疱疹の発症率が高くなり、70代でピークとなって、80歳までに



3人に1人が帯状疱疹になります。帯状疱疹になる人の約7割は50代以上ですが、若い人でも発症することがあり、注意が必要です。

### ＜帯状疱疹の経過＞

発疹が出る前に皮膚の違和感やピリピリ感があらわれることがあります。その後強い痛みを伴って、神経に沿って盛り上がった赤い斑点が現れます。それが水疱となり、水疱が破れてただれ、さらにかさぶたへと変わっていきます。痛みはかさぶたとともに消えることが多いですが、長く続いてしまうこともあります。そのほかの帯状疱疹の症状として、発熱や頭痛が現れることがあります。顔面の帯状疱疹では角膜炎や結膜炎をおこしたり、まれに耳鳴りや難聴、顔面神経麻痺などが生じたりすることもあります。

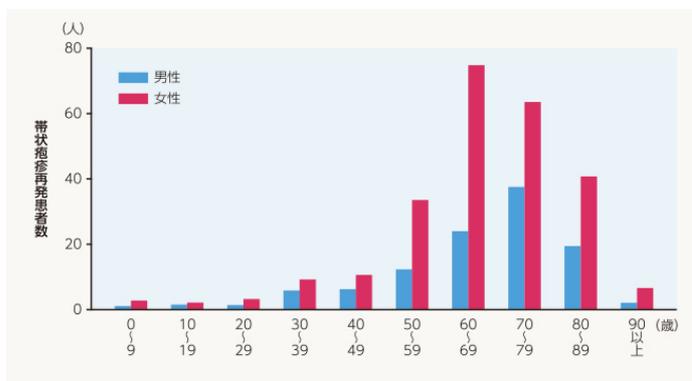


### ＜帯状疱疹の痛み＞

帯状疱疹の発疹の出ている神経の支配領域に一致して痛みが生じますが、皮膚の症状が治っても長期にわたりピリピリするような痛みが持続することがあり、これを帯状疱疹後神経痛といいます。これは急性期の炎症によって神経に強い損傷が生じたことによります。帯状疱疹後神経痛も徐々に症状は軽くなるはありますが、何年も痛みが持続することもあり、これが一番嫌われる合併症です。帯状疱疹後神経痛は約2割の患者さんにおこると言われ、それを防ぐには、早期発見、早期治療により神経の炎症を軽くすませることが大事です。

### ＜その他＞

帯状疱疹は一度かかったら終わりではなく、再発することもあります。体の免疫力の低下などでウイルスが再び活性化してしまうためです。宮崎県で行われた調査では再発率は6.4%で、男女別では男性4.7%、女性7.6%で女性の方が高くなりました。



帯状疱疹は他の人に帯状疱疹としてうつることはありませんが、帯状疱疹の患者さんから乳幼児などに水ぼうそうとしてうつる場合があります。発疹がかさぶたになるまでは小さな子供に接触しないように注意してください。